

【研究種別欄、この欄は担当が修正する可能性があります】

赤ちゃんふれあい体験学習の効果に関する研究

看護学科 佐々木知映 古川照美 佐藤愛

研究目的

赤ちゃんふれあい体験学習が参加した小・中学生の親性準備性や向社会的行動の発達を促すかを明らかにする

研究方法

対象: 令和2年度にベースライン調査を行った学校において、令和3年度に赤ちゃんふれあい体験学習に参加した小・中学生

調査方法: 自記式質問紙調査(属性, 親性準備性尺度, 向社会的行動尺度, 感想)
 分析: 学習参加前後における変化について, 属性はMcNemar検定, 各尺度はWilcoxonの符号付順位検定でそれぞれ有意差を分析した。先行文献やMcNemar検定, ベースライン調査で有意に尺度に関連があった属性を独立変数, 各尺度を従属変数とし, 一般化線形混合モデルを用いて検討した。感想は, テキストマイニングにより分析した。

令和3年度は、COVID-19感染予防のため調査協力を得られたすべての学校において、乳児と直接ふれあわず、新生児モデルを使用した抱っこや着替え、おむつ交換などを実施していた。

結果・考察

配布した422名中411名より回答があり(回収率97.4%), 記入漏れのない350名を解析対象とした(有効回答率82.9%)。

McNemar検定において有意差があった属性は「両親と暮らしたことがある/なし(P=0.003)」「祖父または祖母と暮らしたことがある(P=0.004)」「ボランティアへの参加回数(P=0.004)」であった。Wilcoxonの符号付順位検定では、親性準備性尺度(P<0.001), 向社会的行動尺度(P=0.003)で、参加後に有意に得点が増加した。一般化線形混合モデルの結果、親性準備性尺度得点の増加には「女子(P<0.001)」「両親と暮らしたことがある(P=0.001)」「乳児が好きである(P<0.001)」「乳児と関わった経験がある(P<0.001)」が関連していた。向社会的行動尺度得点の増加には「乳児が好きである(P<0.001)」「乳児と関わった経験がある(P<0.001)」「ボランティアへの参加回数が多い(P=0.001)」が関連していた。

感想については、100回以上の頻出語は「赤ちゃん(540回)」「思う(415回)」「大変(226回)」「分かる(222回)」「体験(129回)」「知る(147回)」「抱っこ(121回)」「自分(110回)」であった。階層的クラスタ分析では「妊婦体験でお腹の重さを学んだ」「赤ちゃんの抱き方を知り大変だと思った」「人形だがおむつ交換や着替えが難しい, 自身の母親の出産」「将来自分子どもを育てる」「親への感謝」「赤ちゃんふれあい体験学習で子育ての大切さ, お世話の楽しさを感じた」の6つのカテゴリであった。赤ちゃんのお世話の大変さや難しさを感じつつも、親性準備性や向社会的行動の発達に影響があったことを示唆させる内容であった。

まとめ

赤ちゃんふれあい体験学習は、乳児と直接ふれあわなくとも参加した小・中学生の親性準備性, 向社会的行動の発達を促していることが示唆された

青森県立保健大学の若手・大学院生奨励研究の概要

